長期療養児の心理的問題に関する研究
分担研究：小児気管支喘息
施設入院療法が気管支喘息児の心理的問題に及ぼす影響

研究協力者　豊島協一郎

要約：施設入院療法を行った気管支喘息児（以下、喘息児と略す）の入院時と退院時にY-G性格検査[1]を実施し、心理面の変化の検討を行った。1）小学生男子喘息児では、低学年は社会的に内向で、高学年になるとこれに自己主張、意欲に欠ける、非活動的が加わり問題が増している。女子喘息児では、低学年は自己主張、意欲に欠け、社会的に内向である。高学年は協調的であるが自己主張、意欲に欠ける。2）中学生男子喘息児は、情緒が不安定で、社会的に内向である。女子は非活動的であるが男子に比べて問題が少ない。3）施設入院後では、小学生では男女を通して社会的内向が改善され対人関係が積極化していたが、高学年児の自己主張、意欲の欠如は男女とも変化しなかった。中学生では、男子の情緒不安定、社会的内向、女子の非活動性がいずれも改善されていた。4）施設入院療法は、喘息児の心理的問題を改善する一定の効果があると考えられ、施設入院によって得られた好ましい変化を退院後も持続させる取り組みが必要と思われる。その為には、医師、看護職以外に、臨床心理士、ケースワーカー、教師などがチームを組む必要があり、医療の枠を抜本的に広くとらえ直す必要がある。又、現在の施設療法で効果を生まなかった面は、施設療法の限界ではなく、設備、スタッフの充実、改善によって検討されるべきである。

見出し語：気管支喘息児、施設入院療法、Y-G性格検査、心理的変化

気管支喘息の治療では、総合治療の視点からアレルギー面での治療、薬物治療、鍛錬療法、さらに心理治療も加えて個々の症例に対処して行くことが必要である。喘息児の心理的特徴は、これまで各種の心理テストを用いて検討がなされているが、Y-G性格検査を用いた結果では、喘息児は小学生ではいわゆる大人しいCタイプが多く、重症群に至るほど情緒不安定なEタイプが増加している[2]。中学生重症児では、積極的なDタイプが少なく、Eタイプが多いと報告されている[3]。これらの喘息児の心理的特徴が施設入院療法で変化するかどうかを見るためY-G性格検査を用いて検討を行った。

［対象と方法］対象は大阪府羽曳野病院小児科病棟で、昭和56年から60年の間に施設入院療法を行った喘息児、小学生67名、中学生37名、計104名である。対象の喘息発症年令、喘息重症度、入院期間は表1の通りである。研究方法は、喘息児に施設入院時と退院前にY-G性格検査を実施し、対照群との間で比較検討を行った。Y-G検査の結果は、12の性格特性の尺度値（表2）を用いて検討を行った。

表1　対象

		小学生低学年		小学生高学年		中学生	
		男子19名	女子12名	男子24名	女子12名	男子27名	女子10名
喘息発症年令		42±26月	35±21月	49±31月	47±27月	67±38月	71±43月
喘息重症度	中等症	12名	4名	9名	6名	13名	5名
	重症	7名	8名	15名	6名	14名	5名
入院期間		240±155日	255±199日	174±95日	182±130日	178±104日	157±78日

※　喘息重症度は日本アレルギー学会基準による。

Y-G 性格検査は、小学生は小学生用、中学生は中学生用を各々使用し、年令差を考え、小学生は低学年（1～3年生）と高学年（4～6年生）に分け、性差を考えて小、中学生とも男女ごとに検討した。

対照群として、大阪府下K 市の公立A 小学校3年生、男子78名、女子86名、計164名、5年生男子105名、女子88名、計193名、公立B 中学校2年生男子143名、女子130名、計273名に、6～7ケ月の間隔で2回実施したY-G 性格検査の結果を用いた。

［結果］小学生男子は、低学年では、入院時は、喘息児は、抑うつ的で (D↑)、集団の中で消極的で (A↓)、友達づき合いも少ない (S↓)。退院時では、抑うつ性は高いが、対人関係面は改善がみられ対照群との間に差はなくなっている。高学年では、入院時は、喘息児は、自己主張が弱く、意欲に欠け、活動性が低い (Ag↓, R↓,G↓)。集団の中でのリーダーシップをとること、友達づき合いがいずれも消極的である (A↓, S↓)。これらの差は、退院時では、対人関係面では低学年と同様

表2　Y-G 性格検査12尺度の特徴

尺度名		特　　徴
D	抑うつ性	陰気、悲観的、罪悪感が強い
C	気分の変化	著しい気分の変化、驚きやすい性質
I	劣等感	自己を過小評価する、自信がない
N	神経質	心配性、神経質
O	主観的	空想的である、過敏性である
Co	非協調的	不満が多い、人を信用しない
Ag	攻撃的	愛想が悪い、攻撃的、社会的活動力大
R	のんきさ	気軽、のんき、活発
G	活動的	活発、ほがらか、身体を動かすことが好き
T	思考的活動	分析的である、物事をよく考える
A	支配的	社会的指導性がある、人を使うことが上手
S	社会的外向	社会的接触を好む、人前で恥ずかしがらない

表3　施設入院療法におけるY-G 性格検査
対照群との比較－小学生－

		男子		女子	
Y-G 検査尺度		情緒面	行動面	情緒面	行動面
低学年	入院時	D↑	T↑, A↓,S↓	NS	Ag↓,R↓,S↓
	退院時	D↑	G↓	NS	NS
高学年	入院時	NS	Ag↓,R↓,G↓,A↓,S↓	C↓,N↓	Co↓,Ag↓,R↓
	退院時	I↓	Ag↓,R↓	C↓	Co↓,Ag↓,R↓

表中英文字は対照群との間でt 検定により5%以上の水準で有意差のみられた尺度名
↑は対照群よりも高いことを、↓は対照群よりも低いことを示す

に改善がみられ、活動性も高まったが、自己主張の弱さ、意欲に欠ける点は、変化がみられなかった。小学生女子では、低学年は、入院時は喘息児は自己主張が弱く、意欲に欠け (Ag↓)、のんきでなく(R↓)、友達づき合いが消極的である (S↓)。退院時には、これらの対照群との差はなくなっている。高学年は、入院時は、情緒面は安定しているが (C↓, N↓)、自己主張が弱く、のんきでない (Ag↓, R↓)。退院時もこれらの特徴は変化がなかった。以上の小学生喘息児の特徴をまとめたものが表3である。

中学生では、男子喘息児は、入院時は抑うつ的 (D↑)、気分の変動大 (C↑)、神経質 (N↑) と情緒が不安定であり、行動面では集団内のリーダーシップの欠如 (A↓)、非社交性 (S↓) と問題点が多かったが、退院時には対照群との間で有意差がみられた項目はなく、施設入院中に改善があった。女子喘息児は、活動性は低い (G↓) ものの男子に比べて問題点は少なく、退院時には活動性も改善していた。これらの中学生喘息児の特徴をまとめたものが表4である。

［考察］Y-G 性格検査を用いて喘息児の施設入院療法での心理的変化を検討した結果、施設入院療法は、喘息児の情緒面、行動面の問題を改善することが認められた。これらの改善傾向を考察すると、小学生では、低、高学年とも、情緒的には安

表4　施設入院療法におけるY-G 性格検査
対照群との比較－中学生－

	男子		女子	
Y-G 検査尺度	情緒面	行動面	情緒面	行動面
入院時	D↑,C↑,N↑,O↑	A↓,S↓	NS	G↓
退院時	NS	NS	NS	NS

表中英文字は対照群との間でt 検定により5%以上の水準で有意差のみられた尺度名
↑は対照群よりも高いことを、↓は対照群よりも低いことを示す

定しているが、行動面で、自己主張の弱さ、意欲の欠如、活動性の低さ、集団内でのリーダーシップの欠如、友達づき合いの消極性などの問題があり、これらは、低学年より高学年に問題が大きい。施設入院療法により、友達関係を中心とした対人関係面では改善がみられるが、高学年児の自己主張の弱さや意欲に欠ける所は、変化はみられない。高学年児のこのような側面の改善を得るためには、施設療法の中で、自己表出を高めていく環境づくりが必要と思われる。例えば、病棟運営に於て集団管理に偏らず個性の尊重が十分に行われるように、プレイルームや娯楽の為のスペースの確保、患児の話し相手になれる十分の人数の生活指導員の確保、プライバシーが守れる病棟病室への改造などが必要と考えられる。それと共に養護学校など、病院内の教育施設と体制の拡充が必要であろう。

中学生では、男子に入院時問題点が多く、その内容も、行動面の他に、小学生ではみられなかった情緒面の不安定さがでており、思春期には入り、動揺する心理がみてとれる。これらの情緒面、行動面の問題は施設入院中に改善がみられ、施設入院が心理的安定と積極性をもたらしたと考えられる。女子は入院時から問題点が少なく、男子に比べ心理的問題が少ないとも言えるが、このことは施設入院によって改善が期待される心理的側面が少ないとも言え、女子への対応を考える上でさらに検討を要する所と思われる。

以上をまとめると、気管支喘息児に対する施設入院療法は、喘息児の心理的問題の改善に一定の効果を有すると考えられるが、年令により、又、性差により、施設入院時に喘息児がかかえる心理的問題はことなっており、施設入院によって改善をみやすい心理的側面と、変化しにくい側面がありこれらの傾向を把握して、より心理面に配慮を加えた施設入院療法の運営が望まれる。今回の結果では、中学生男子を除いて情緒面は安定していたが、Y-G 性格検査は、意識面をとらえる検査であり喘息児の情緒面をに関しては無意識面をとらえる心理テストによる検討がさらに必要と思われる又、施設入院療法について英語圏の文献を検索すると、アメリカでは社会背景の変化に依り施設入院療法の維持が困難で、出来るだけ短期入院で効果をあげようとの研究が増加している。しかしアメリカでは小児喘息死の増加が問題となっていることを考慮する時、我が国が無批判にその轍を踏むべきではない。むしろ社会的、心理的問題を有した重症喘息児にbio psycho socio ethical な治療が出来る喘息児施設（病院）へと脱皮することこそ社会のニードに応える道である。

参考文献

1）辻岡美延：新性格検査法 ーY-G 性格検査応用研究手引ー, 日本心理応用研究所, 1977.

2）岡田正幸・他：Y-G 性格検査による気管支喘息児とその両親の性格特性の検討, 小児科診療, 47: 408 - 411, 1984.

3）岡田正幸・他：Y-G 性格検査による中学生気管支喘息児の性格特性の検討, 小児科診療, 49 : 1385 - 1388, 1986.

発表文献

1）岡田正幸・他：気管支喘息児の施設入院療法における心理的変化ー小学生男子ー, 小児科診療, 49 : 238 - 242, 1986.

2）岡田正幸・他：気管支喘息児の施設入院療法

における心理的変化ー 小学生女子 ー , 小児科診療,
49 :1380- 1384, 1986.
3) 岡田正幸・他：中学生気管支喘息児の施設入
院療法における心理的変化 , 小児科診療, 49 :1389-
1393, 1986.

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:施設入院療法を行った気管支喘息児(以下、喘息児と略す)の入院時と退院時に Y-G 性格検査を実施し、心理面の変化の検討を行った。1)小学生男子喘息児では、低学年は社会的に内向で、高学年になるとこれに自己主張、意欲に欠ける、非活動的が加わり問題が増している。女子喘息児では、低学年は自己主張、意欲に欠け、社会的に内向である。高学年は協調的であるが自己主張、意欲に欠ける。2)中学生男子喘息児は、情緒が不安定で、社会的に内向である。女子は非活動的であるが男子に比べて問題が少ない。3)施設入院後では、小学生では男女を通して社会的内向が改善され対人関係が積極化していたが、高学年児の自己主張、意欲の欠如は男女とも変化しなかった。中学生では、男子の情緒不安定、社会的内向、女子の非活動性がいずれも改善されていた。4)施設入院療法は、喘息児の心理的問題を改善する一定の効果があると考えられ、施設入院によって得られた好ましい変化を退院後も持続させる取り組みが必要と思われる。その為には、医師、看護職以外に、臨床心理士、ケースワーカー、教師などがチームを組む必要があり、医療の枠を抜本的に広くとらえ直す必要がある。又、現在の施設療法で効果を生まなかった面は、施設療法の限界ではなく、設備、スタッフの充実、改善によって検討されるべきである。